

Title	林永修と『風車』：台湾書籍雑誌商組合台南支部・詩書と美装本の展覧会、台南新報の文芸欄、西脇順三郎記念室・資料より
Sub Title	Lin Eng Siu and 'Le Moulin' : from 'Exhibition beautiful books and poetry books' by Taiwan Books and Magazines Commercial Union Tainan Chapter, the fine arts and literature columns of the Tainan Shimpo, and the collection of Junzaburo Nishiwaki Memorial Room in Ojiya City Library
Author	吉田, 悠樹彦(Yoshida, Yukihiro)
Publisher	慶應義塾中国文学会
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾中国文学会報 (Bulletin of The Keio Sinological Society). No.5 (2021. ) ,p.52 (25)- 76 (1)
JaLC DOI	
Abstract	本研究は台湾の詩人の林永修と風車詩社の同人の活動に関して、台湾書籍雑誌商組合台南支部による詩書と美装本の展覧会や台南新報の文芸欄、1933年から1934年の台湾の文学界や社会との関係から論じる。さらに西脇順三郎の自筆の書き込みが残されたウィリアム・ブレイクに関する蔵書資料を参照することで、林が学んだ西脇のブレイクに関する見解を踏まえ西脇から学んだブレイク像について考察する。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20210331-0076">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20210331-0076</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 林永修と『風車』

— 台湾書籍雑誌商組合台南支部・詩書と美装本の展覧会、  
台南新報の文芸欄、西脇順三郎記念室・資料より —

吉 田 悠樹彦

### 概要：

本研究は台湾の詩人の林永修と風車詩社の同人の活動に関して、台湾書籍雑誌商組合台南支部による詩書と美装本の展覧会や台南新報の文芸欄、1933年から1934年の台湾の文学界や社会との関係から論じる。さらに西脇順三郎の自筆の書き込みが残されたウィリアム・ブレイクに関する蔵書資料を参照することで、林が学んだ西脇のブレイクに関する見解を踏まえ西脇から学んだブレイク像について考察する。

**キーワード：**林永修、台湾文学、『風車』、西脇順三郎、慶應義塾大学

### 1 台湾文学の芽生え

台湾は1895年に日本の植民地になる。台湾には早い段階、明治の末には短歌・俳句が入ってきていた。日本人による句集・歌集が刊行され詩集も刊行されるようになる。

日本統治時代には清朝末期の詩のブームを受けながら、メディアの現代化から漢詩を発表する場が増えた。文学者たちは日本人が主催する詩社に参加した。優れた詩人たちが多く活躍した。

1900年代にはすでに林猷堂らは英国に対するアイルランドの反抗を当時の台湾と日本の関係にイメージしていた。抗日との文脈では1900年代末にはアイルランドは台湾に登場してくる。植民地になったが儒教や詩社などは抵抗の場となった。そして郷土文化・郷土文学を考える上で1920年代にはアイルランドが例として取り上げられるようになる。次第に台北のみならず、台中、台南でも文学が盛んになり詩集が刊行されるようになった。

この日本統治時代の台湾では北京語や台湾語で活動する詩人たちや、表記の問題、新・旧の文学論争が起きるようになってくる。次第に日本語で表現をする詩人たちもでてくるようになった。

日本時代には中国語の口語文、伝統的な漢文、台湾語文、そしてローマ字の利用が制限された。様々な形態の台湾語文の相互競争はあったが、“大局観が大事”という前提と共に相互協力・受容の形にとどまった。新聞では中国語の口語文による新聞発行が進んだ。臺灣民報では中国語の口語文が大体的にアピールされ、そのことにより伝統文學を批判される。しかし後に漢詩と新体詩を文芸欄に掲載した。張我軍は1925年に台湾初の口語文の新詩集『乱都之恋』を出版している。張は1924年に厨川白村を『台湾民報』を通じて台湾へ伝えた<sup>(1)</sup>。

続いて台湾初の日本語詩集である陳奇雲『熱流』が1930年に刊行される。台湾人作家による表現力が完成された証とされる。同年に水蔭萍（楊熾昌）の詩集『熱帯魚』も刊行される<sup>(2)</sup>。翌1931年に王白淵の作品集『棘の道』も出版された。1933年には『台湾新民報』の社説欄で簡単な文語文が使われた。文学者の役割も新旧の文学論争による観点も、様々な文学環境に取り巻かれる中で次第に変化を遂げた。

この文化統制が本格化する前の時代1930年から1940年の間は統制へつながる流れがでてこようとしている時代だ。本土の東京・京阪ではモダン文化が華咲いた時代だ。

1930年代の台湾社会は日本化が進んだ。労働者たちの言語は台湾語で、企業の間層も台湾語と少しの日本語を用いた。製糖産業などで働く上流階級は日本語を話した。30年代前半には郷土文学論争も起き、言文一致の為に台湾語口語文を用いるべきだという論も提起された。

1935年の各都市の人口は台北市が約27万人で東京府が約637万人、沖縄県は約57万人という時代だ。台北は大きな都市であったが東京や大阪といった大都市と比べるとスケールは小さかった。また都市空間に対する対立項としての自然・郷土として郊外に淡水などをもっていた。同時代的な現象としては民話の伝承や自然環境の変化を分析し都市開発とも接点を持つことがあった柳田國男・折口信夫らによる民俗学の流行を上げることができる。柳田や折口は近代化・都市化の中で今日の成城学園・喜多見などの田園都市構想と関係を持ちながら活動を重ねた。彼らはまた日本青年館において郷土芸能を紹介する活動を行うなどモダン日本の中に郷土への視線を形成していくことになった。成城学園（砧村）に住んでいた北原白秋は1934年に台湾を訪れている。同じような近代化・

都市化の現象は台湾の台北にもみることができるといった状態にあった。台北郊外の観光地の淡水の自然は台北人や旅行者たちから愛されることになった。

メディアはどのような状態であったであろうか。新聞は朝日（大阪）・毎日（大阪）の外地版が流通していた。大新聞社の関西支社の外地版が目立つ。その一方で、台湾日日新報など台湾で刊行されていた新聞も複数存在した。台北のみならず台南など地域で刊行される新聞もあった。雑誌は台湾文芸連盟による『台湾文芸』などの文芸誌も刊行がはじまっており文化的成熟をみせつつあった。台湾日日新報の紙面ではアイルランド文学のイエイツなど代表作家が論じられ時には抵抗の文学として紹介されることもあった。

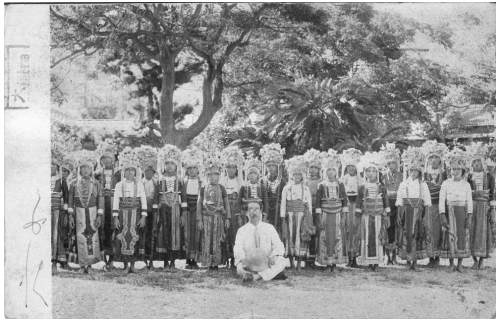
文学のみならず演芸・映画・美術の団体が存在し、雑誌も刊行がはじまっていた。ラジオでは内地からの中継で宝塚・音楽の舞台が紹介されることがある一方で、台湾での島内での放送も行われた。台湾の雑誌は文芸誌も刊行がはじまるなど文化的成熟をみせつつあった。文学のみならず演芸・映画・美術の団体が存在し演芸や映画の雑誌も刊行された。

この時代の台湾で郷土主義が関心を持たれたことは重要だ。台北帝国大学教授の矢野峰人も郷土主義を論じた。矢野はイエイツを研究した厨川白村に学んでいる。彼は台北帝国大学に代表的なアイルランド文学の詩人イエイツを1929年から1930年にかけて教授として招聘する計画を立てていた。矢野は西脇の一歳年上であり英国留学時代にイエイツやグレゴリイ夫人と面識があった。イエイツは日本に深い興味をもっていた。彼は1919年に野口米次郎に来日の意味をみせた。慶應義塾大学にいたアイルランド出身の詩人カズンス（James Cousins）の後任として野口は招聘を考えていた。しかしこの案は大学とスポンサーの新聞社の行き違いで実現しなかった。10年後のこの時も残念ながらこの計画はイエイツの側の事情で実現できなかった。

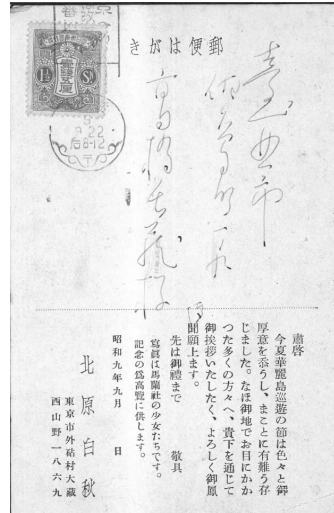
同時代の朝鮮半島でも台湾でもアイルランド文学への評価が高かった。さらに台湾では日本人の側からもアイルランド文学や郷土主義に関心が高かった。1935年の『台湾文芸』10月号にも郷土主義が登場する。インテリ層のみならず民衆に広めるために郷土的色調に富んだ文学、郷土を啓蒙するに足る文学作品が望ましいとある。台湾にも第二のアイルランド文学を建設する必要があるとも記される。

一方、矢野は本名・禾積の名で『アイルランド文藝復興』（弘文堂書房）を1940年に刊行している。アイルランド文藝復興を政治の自治と呼応するものとしながら、社会問題や政治問題と即断するのではなく、この運動の純粋な文芸

の創造をすることが重要であるとした上で、その径路を一通り秩序だて正確に叙述することを考えていた。英国とアイルランドの関係を日本と台湾と置き換えてみたときに矢野の日本人や台北帝国大学・教授としての立ち位置を示しているようにも考えられる作品と考えることができる<sup>(3)</sup>。



図：北原白秋ハガキ 高橋長蔵（詩人）宛  
1934年・9・22（消印）（私蔵）  
馬蘭社での記念写真を感謝状に用いている。写真の横にサインがある。



## 2 台湾における郷土主義

郷土を考える台湾の文芸界にとって朝鮮出身の“半島の舞姫”で知られた舞姫・崔承喜が1つの先行例になっていた。この1930年代の台湾を代表するイベントの1つが1936年の夏に行われた崔承喜の台湾文芸連盟の招聘による台湾公演だ。これは舞踊界のみならず、台湾の文学たちや演芸にも影響を与えた。この企画は本土のように台湾文芸連盟の二周年のイベントとして同年に行われた音楽会と共に企画された。文芸のイベントで演芸が上演されることは珍しくなく台湾文芸連盟が崔を招聘することも珍しくなかった<sup>(4)</sup>。

崔は台北では1936年7月4日から台北大世界館で3日間公演を行った。大阪朝日新聞の台湾版は内地と朝鮮と台湾の三角親善融和舞踊と崔の事を伝え、この來台が師・石井漠と共に来た昭和元年か昭和2年（1927年）以来であるとしている。演目は朝鮮に取材したものが目立ち「剣の舞」や「エヘラ・ノアラ」といった代表作もみてとれる。基隆劇場（7月6日）、台中座（7月7日から3日間）、台南宮古座（7月11日から2日間）、高雄館（7月14日）、嘉義座（7月

15日)と全島で踊った。台湾の第一高等女子学校を始めとする女学生千名ほども鑑賞した。

崔は7月2日に台湾に到着後にラジオ出演している。続けて3日にはサイン会、5日に植物園で関西写真連盟の撮影会など各種イベントも行われた<sup>(5)</sup>。この時、崔は台湾時事新報の記者と会見をおこなった。主催の台湾文芸連盟の張維賢らと現れた崔は理論家ではなく本能的に芸術を生みだしていく瞬間の舞台にすべてをかけるところの気質的詩人だったと記されている<sup>(6)</sup>。同じ植民地出身の崔に憧れた台湾人の一人に呂赫若を上げることができる。台湾における崔の影響は見逃せない。文学では淡水の自然を愛した王昶雄が崔について言及している。舞踊家では1943年に東京で公演した崔承喜と石井漢に学んだ林明德がいる。王と林の間には交流があった<sup>(7)</sup>。

この公演に関わった呉坤煌は東京で台湾人によるものも含め左翼運動団体と接しながら活動した才能だ。その活動は極東に張り巡らされた左翼のネットワークによるものもあり台湾と日本の間のみでなく幅広かった。彼は築地小劇場で村山らの指導で学んでいる。1933年に呉は朝鮮左翼劇団の金波宗らの支持を得て、築地小劇場で「出草智」や「霧社の月」などの台湾舞踊と民謡を披露した。この上演から連なるように呉は台湾藝術研究会を設立し1933年に『フォルモサ』を創刊する。彼は台湾文芸連盟の東京支部長として左翼文学や演劇、舞踊の国際交流と取り組んだ。彼は1936年に台湾へ崔を招くことになる。その成功は当局に「舞踊を借りて民俗啓蒙運動を策動する」[原文ママ]とみなされ彼は逮捕された。このことも一因になり文芸連盟の解散となる<sup>(8)</sup>。

さらに郷土主義を考える上で重要なのが西川満だ。西川は著作も多く仕事も多岐にわたるが、雑誌『媽祖』(1934年-1938年)は限定版として刊行された豪華雑誌だった。この雑誌には台湾・内地から優れた書き手の百田宗治、日夏耿



図：台湾における崔承喜  
(台湾日日新報、台湾日日新報社、  
1936年7月3日より)



図：崔承喜 自筆クリスマスカード（私蔵）

之介、伊良子清白らが執筆をしている。絵・カットは立石鐵臣、宮田弥太郎だ。水蔭ら『風車』の詩人たちも寄稿している。

『媽祖祭』（1935年）は音韻や言葉の響きが綺麗な詩集だ。現代の一青妙・窈の祖父にあたる顔国年も詩中に登場する。

西川満の『媽祖』は高級文化である。西脇順三郎の詩と詩論は3編掲載された。詩は西脇の代表詩集である『Ambarvalia』（1933年）に収録されている。このタイトルの意味はラテン詩人のティプルスにちなんだ“穀物祭”という意味だ。『媽祖』に掲載された西脇の詩歌は西脇が初期の詩編を掲載した背景には郷土主義というものもあるのではないか。西脇は1894年生で矢野の一歳下にあたり同年代である。西脇の文学の方向性は当時の台北帝国大学の矢野らと異なり超現実主義であった。台湾の郷土に通じるような南国風の詩編たちだ。

『媽祖』に掲載された西脇作品	初出 *『定本 西脇順三郎全集』に基づく。
『媽祖』第2冊1934：「詩の歴史」	初出は1930年2月の『詩神』初出
『媽祖』第3冊1934：「雨」	『Ambarvalia』収録 （『尺牘』1933年2月初出）
『媽祖』第3冊に収録：「眼」	「眼」未詳 『Ambarvalia』収録

『媽祖祭』の記念号では西脇の西川のこの詩集に対するコメントが多くの関係者とともにでている。西脇は西川のことを「近来にない異国風な詩集にて失礼ながら驚き、到底内地では夢にでも見るができない感じであります」と『媽祖』、媽祖書房、媽祖祭・記念号（1935年）で褒めている<sup>(9)</sup>。

西川満は早稲田大学で学ぶがその時代に山内義雄と知り合っている。山内は百田が刊行している詩誌『椎の木』（第三期：1932年～1937年）の同人であったことから西川は在学中から寄稿していた。この媒体は江間章子ら話題の新人たちが多く執筆をしていた。この詩誌には百田と交流があった西脇順三郎も掲載されており、雑誌の刊行元の椎の木社は1933年に百田が刊行人となって西脇の『Ambarvalia』を出版している。西川満と西脇はこの『椎の木』や神戸詩人事件（1940年）で検挙される瀨名與志春と交流があった。瀨名の『萌の思意』（椎の木社）の感想が雑誌『茉莉』に掲載されている。西脇は百田宗治と俳句と詩歌の指標とする俳誌『句帖』（1936）の選者になった。さらに1940年になると台湾文芸家協会が設立された。この賛助会員の中に百田宗治がいる<sup>(10)</sup>。

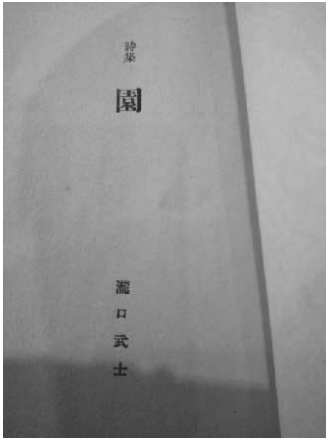
### 3 1930年代～40年代の台湾で活動した詩人たちと読書文化

1930年代になると台湾と日本の文学界はつながりが大きくなっていった。そのつながりの広さを示す詩誌に台中で活動をしていた本田晴光（茂光）による『茉莉』（茉莉社）がある。このタイトルは当時愛読された安西冬衛の詩集『軍艦茉莉』（挿絵：西脇マージョリー、1929年）からの影響を感じることができる。

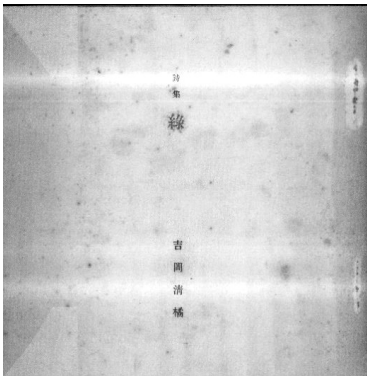
本田は中原中也、立原道造や神戸詩人事件（1940年）で検挙される瀨名與志春と交友があった詩人だ。この詩誌には安西や仲間の瀧口武士ら大連の詩人たちも寄稿するのみならず、本田は大連を訪れている。高祖保や岡崎清一郎や竹内てるよといったモダニズム詩人たちが寄稿する台中から各地へ発信されたこの媒体は一目をおかれていた。本田は当時の5大財閥の1つの霧峰林家でしられる霧峰の公学校など台中の学校で教えながら活動をした。茉莉社を通じて『茉莉』や吉岡清橘『緑』（限定150部）など詩集を刊行した。

この時代にウィリアム・ブレイクも日本に入ってきていた。野口米次郎は1913年にオクスフォード大学で松尾芭蕉の俳諧について講演したときにウィリアム・ブレイクの展覧会をみている。近代日本においてブレイクを研究したことで知られる思想家・柳宗悦も台湾へ紹介されていた。日本のブレイク研究では柳宗悦が良く知られている。柳は『民芸台湾』で対談を行っておりその民芸品のコ





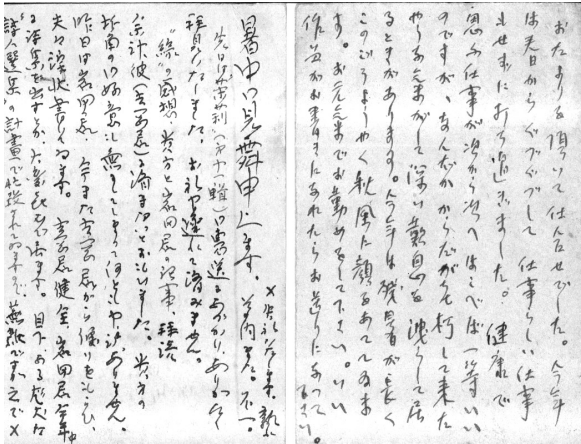
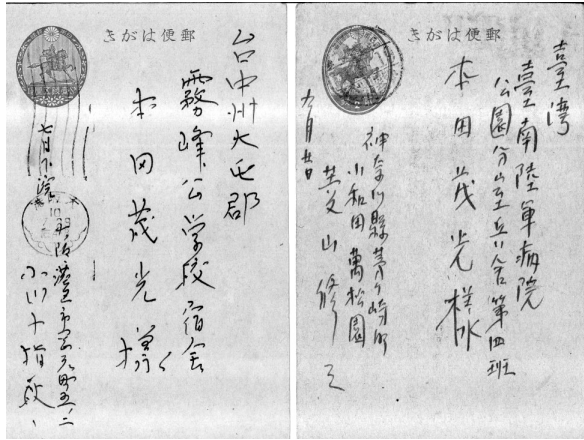
瀧口武士,「園」本田茂光宛 本田蔵書印入, 椎の木社, 1933年(私蔵)



吉岡清橘,「緑」, 茉莉社, 1934  
(私蔵)

レクシオンの中には台湾の民芸品も含まれる。しかし柳はブレイク研究を壽岳文章に譲り自ら起こした民芸運動の方向へと進んでいく。

西川満は1933年に早稲田大学を卒業すると台湾日日新報で働いていた。西川は学芸欄で活動した。その紙面ではこの台湾愛書会の活動と連なるように“読書普及”という企画が行なわれていた。この“読書普及”では西川自身が記事を執筆することもあれば、企業の社長から作家まで幅広い層にわたる日本人の名士たちが読書経験から最近読んだ愛読書まで短い原稿を寄せている。台湾日日新報1940年1月20日によると台湾日日新報主催の読書普及運動の一環として「台湾文芸資料展」(1940年1月20日～22日)が行われ台湾から発行された資料



小川十指秋（左）、菱川修三による本田茂光（晴光）への私信（私蔵）  
小川の文面には『茉莉』や『緑』など本田が出していた出版物への感想がみえる。

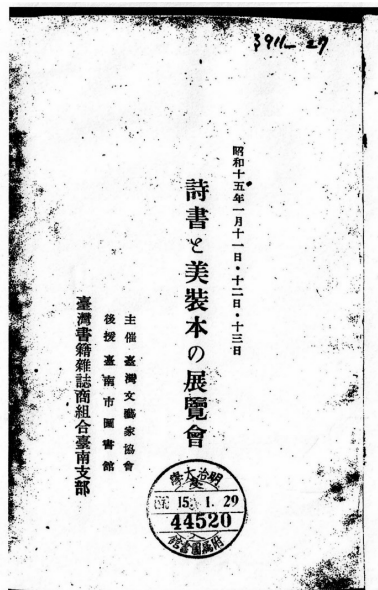
400点が一堂に展示された。さらに東京より佐藤春夫や堀口大学、西條八十といった著名作家の色紙を含む、立石鐵臣ら台湾で活動する色紙120点を一枚3円以上の入札で頒布した<sup>(11)</sup>。

この読書普及運動と図書館週間と呼応するように同じ年月に台南では「詩書と美装本の展覧会」（台湾書籍雑誌商組合台南支部）が1940月11日から13日まで台湾文芸家協会の主催で行われている。台南公会堂が会場だった。詩歌美装本や各種限定本や台湾文芸関係の書籍が数百点展示され、この種のものに恵まれない台南市で最初の展覧会として多大な反響を呼んでいると台湾日日新報1940年1月10日付は伝えている。台北より島田謹二と西川満、加えて台南の新垣宏

一と前島信次が講演を行った<sup>(12)</sup>。

この台南で行われた書籍の展覧会の『詩書と美装本の展覧会』（台湾書籍雑誌商組合台南支部、1940年）の目録が残っている<sup>(13)</sup>。その中には壽岳や西脇順三郎の著作も含まれている。出品者の記録もあり台湾人では水蔭萍（楊熾昌）がそのコレクションから西脇の『Ambarvalia』や『輪のある世界』、『ヨーロッパ文学』やジョイスの翻訳である『ヂョイス詩集』などを含む自らのコレクションした本を多く出品している。“台湾文芸の部”もあり、台湾文学を発信しているという方向性をみることができる。この中には当時20冊や100冊など数少なく印刷された現地の書籍たちも含まれている。台湾文芸というジャンルに対する読者層の形成を感じることができる。台湾文芸を育むことももちろん背景にあったはずだ。

これらの出来事の背景には日本の文化統制もあった。内地では1939年頃にそれまでの図書週間から読書の秋や読書週間運動へと移行がはじまる。これは樺太や朝鮮半島などでも行われた。時代を反映するように朝鮮半島総督府図書館は『文献報国』というタイトルの雑誌を発行しており、その紙面には国民精神総動員の為に図書館週間を行うという記事が1932年に掲載されている<sup>(14)</sup>。





動し、『陳夫人』を発表したことで第一回大東亜文学賞を受賞する。この作品は演劇化もされるほど話題になり、台湾でも高い関心をもって論じられた。庄司は詩人の原民喜や蘆原英了と交流があった。戦後は慶應義塾大学で教鞭を取り小説家としても活動をした。没後、西脇は「シャン フェネーヴル」という本人や原との交流の日々を愛情と共に描いた詩を残している<sup>(15)</sup>。林永修も同じ台南出身で慶應義塾大学文学部の学生で詩人・英文学者の西脇順三郎に学んだ。

この時代、台湾で活躍する日本人の中の詩人にも藤原泉三郎のようにプロレタリアに影響される作家たちが出てきていた。そして台湾南部の大変な生活の中から塩分地帯と呼ばれる詩人たちもでてくるようになる。塩分地帯とは1930年代に台南州北門郡において自然に形成された文学団体の名称である。彼らの作品は郷土色が強く、製塩の村の情景が描かれており、台湾各地の文学者がこの地域の作家と交流したときに自分たちのことを塩分地帯の作家と呼んだ。それがこの地方で詩を中心にして手掛けられた文学作品の総称になった。1935年に楊逵や頼和らが「台湾新文学」を立ち上げると呉、郭、王が編集委員に加わる。1939年に西川満が台湾詩人協会を立ち上げ「美麗島」を刊行すると郭や王が寄稿した。

この塩分地帯の作家たちの作風は楊熾昌（水蔭萍）や林永修といった「風車」の詩人たちや当時の台湾人の中でも日本人に近い位置にいた経済的に豊かな生活を送っていた作家たちと異なっていた。

もしも矢野峰人がイエイツを台北帝国大学へ招聘する計画が実現していたら台湾や沖縄・北海道・植民地の文学界にどのような影響を与えただろうか。イエイツは日本人の側に立ったか台湾人の側に立ったか、台湾語や新旧文学論争についてどう考えたか興味深いことである。

## 5 西脇順三郎に学んだ台湾の詩人：林永修について

### 5-1 林永修に関係する新資料

林永修（LIN Eng Siu、1919年10月20日-1944年6月5日、ペンネームに林修二、南山修、影紫雨）についてはその一生とこれまで所在が解らなかった慶應義塾大学時代の作品に関して『林永修と林妙子 台湾と西脇順三郎』（「三田文學」春号、2020年）にて論じた<sup>(16)</sup>。その後さらに林に関係する資料をみつけることができた。1つは台南新報の文芸欄における林と『風車』の仲間たちの

活動である。この中に『風車』の同人たちが『風車』名義で掲載された記事が2本存在する。本稿ではその内容について考察を行う。

もう1つは小千谷の西脇順三郎記念室に残されている書き込みの入った西脇順三郎のブレイクに係する資料たちである。こちらからは西脇によるブレイクへの関心の痕跡が残されている。

この2点に基づき、林永修についてさらに考察を行いたい。その上で解ってきたことを次にまとめる。

### 5-2-1 台南新報文芸欄に残る『風車』の記録

日本統治期の台湾の新聞は欠号が多い。林永修も寄稿した台中より刊行された台湾新聞の様に1940年以前の記録が存在しない新聞もある。台南新報も同様で、年や月によって記録が存在しないものもある。従って限られた台南新報の文芸欄に残されている記録から『風車』やその関係者の記録を論じたい。

『風車』は3号が存在するのみである。台南新報の文芸欄には『風車』のメンバーが寄稿をしているが、『風車』名義の記事は2本存在残っている。

この台南新報は『風車』が刊行された1933年から1934年の前後をみていると欠号が目立つ。今日では1933年5月～8月、1934年8月～10月が存在する。なお台南新報は1937年4月1日からは台湾日報と改称される。

1933年に水蔭萍（楊熾昌）は6月に風車詩社を結成する。メンバーは楊、林永修、張良典（丘英二）、李張瑞（利野蒼）、戸田房子（外田ふさ）、岸麗子、尚梶鐵平（島元鐵平）だった。10月に『風車（Le Moulin）』不定期刊を刊行する。ガリ版印刷で75部発行だった。この雑誌は翌1934年まで4号まで刊行された。戸田は1938年に東京に活動の場を移すが1945年まで台湾の新聞や雑誌に寄稿していた。戦後、彼女は『詩人の妻生田花世』で平林たい子文学賞受賞するなど日本で活躍した<sup>(17)</sup>。この詩社は戸田を送りだした詩社でもあった。

楊も李も共に内地に短い期間だが学んだ経験があった。楊は1930年から1931年まで滞在中文化学院に学んでいる。彼にとって西脇順三郎は大きな存在だった。楊はまた演芸を好んだ<sup>(18)</sup>。彼は紅い風車がまわる東京のムーラン・ルージュ新宿座に足を運んだという。パリのモンマルトルの麓には赤い風車が印象的なムーラン・ルージュがあり若者たちの憧れの場であった。台湾でも当時の内地の演芸は良く知られラジオで宝塚歌劇団の公演が中継されることもあった。

台南は台南新報の文芸欄にみることができるように文芸が芽生え育っていた。歌人公医として知られ大正期から台湾南部を多く作品に詠んだアララギ系の加

納小郭家も活動をしていた。1922年に創刊される「あらたま」の時代にはすでに短歌や俳句、そして自由詩のグループの作品が台南新報に掲載されている。この新聞の文芸欄には首都圏の大家や著名人が多く寄稿している。大正時代末には誌面に独自の文芸が芽生えつつあることを示すように1926年10月4日の台南新報の南文芸欄には「私が何故個人雑誌をだしたいか」という記事が掲載された<sup>(19)</sup>。南文芸という文芸欄のタイトルにもみてとれる台湾南部からの文芸という流れが現地の作家や愛好家の間にあったことが解かる。

台南新報の文芸欄の担当になったのは水蔭萍（楊熾昌）である。したがって彼の編集や交流していた地域の作家たちの持つ意味は大きいと考えられる。1933年ごろの台南新報の文芸欄には風車詩社以外では自由詩では詩風帯社が登場する。台南のみならず嘉義の俳句結社のうぐいす吟社による作品も定期的に掲載されていた。書き手は決して数は少なくなかったのであろうが、李張瑞はペンネームの利野蒼を使い分けながら活動している。張良典（丘英二）は本名で執筆をしているが、台南新報の紙面には同人物と推測できる詩人の丘一二郎の名もある。

『風車』とには全島で鉄道が開通した事、また電話が通じるようになったこと、さらには赤化への警戒と弾圧などが紙面を彩っていた。台南新報にはラジオや演芸の記録も残り、新聞とラジオ、それに様々な芸術ジャンルが連動していた様子をうかがい知ることができる。



台南一中卒業生（林永修の卒業記事 最下段、右から4人目）台南新報，台南新報社，1933年3月2日

台南新報には嘉義や高雄などの中部・南部の都市の入試問題や卒業生の記録が掲載されている。その中に林永修の卒業記事も存在する<sup>(20)</sup>。

『風車』に関しては次のような記録が存在する。1933年10月に創刊号が刊行されるが、その2か月後の1933年12月9日の台南新報にその評が掲載されている。まず島元鐵平の『風車』に刊行する評がでている<sup>(21)</sup>。島元は『風車』創刊号に対し掲載された小説の創作を水準以下とし、エッセイもまた扱き下ろしている。詩も単色であるとしこちらも重ねて批判している。島元はア・ラ・カルトと題された評論の項目を絶賛した。同日の文芸欄には外田ふさ(戸田房子)が「十一月のスケッチ」と題した若々しい女性の感性が映える自由詩を載せている。この創刊号はまだ発見されていない。しかしこの1933年後半の台南新報の文芸欄をみていくと、水蔭萍(楊熾昌)の持つ新進の若手らしい感覚や文芸欄の編集を通じたニューウェーブとしての『風車』やその同人たちを送りだそうという意気込みを感じ取ることができる。それはモダニズムの影響下にあった台湾人作家たちの新しい文学をもとめるエネルギーや、この時代の台湾に住んでいた日本人女性の詩など、台南新報に掲載される内地の大家や著名人たちの論考とは異なるものであった。丁度、1934年7月19日に北原白秋がこの地域にやってきたことを歓迎する「歓迎の夕」が行われた(台南新報, 台南新報社, 1934年7月11日<sup>(22)</sup>)。しかし『風車』のメンバーからはこの内地の大詩人に対して大きな言及がないことは興味深い。

台南新報の文芸欄は『風車』3号の記事が掲載されたこともあるようだ。水蔭萍(楊熾昌)は3号の巻頭にエッセイ「炎える頭髮 詩の祭禮のために」を寄せているが、これは台南新報1934年4月8日と4月19日付に上・下に分けて掲載されたものである<sup>(23)</sup>。この記事は1934年3月末に執筆された記事であると筆者が述べているため、この月の3月に刊行された『風車』3号に掲載された記事が新聞に転載されたと考えても良い。

『風車』3号に利野蒼(李張瑞)が寄せた「感想として…」は新人作家からみた台南の文壇と現地のメディアの状況を良く記録している。彼はまず台中から刊行されていた台湾新聞の絵画展覧会の報道に対し台湾の芸術とジャーナリズムのあり方として評価を示している<sup>(24)</sup>。この時期の台湾新聞の記録は今日では部分的に存在しないことから詳細は不明だが李からみて新しい流れだったようだ。なお台湾新聞は中部台湾新聞が改称した新聞で1933年にはこの名称になっていたようだ。続けて李は各新聞の文芸欄に対しても考察を述べる。この時代は各新聞の文芸欄が台湾文学の成長の上で大きな場となっており、それぞれの



メディアに掲載される書き手やその方向性は重要だった。その動向に新人の李もアンテナを張り巡らせていた。今日当時の紙面を確認できる新聞を見ていこう。島内新聞文藝欄随一の観のある台湾新聞はかつて「中報文藝」として賑やかだったが、そろそろ冬眠から起き上がるべき期としている。台湾日日新報に対して西川満の評論は専門的だが心図良いとしている。台南新報については一時期大変な不振だったが最近活気がでてきていると記している。李は「南文芸」復興が叫ばれても良いと述べている。台湾新民報（1941年2月11日より興南新聞に改称）の文芸欄に関しては長編の発表の場となっているが「通俗小説の入門のような愚劣な作品の羅列」であると厳しく批判している<sup>(25)</sup>。

この1933年から1934年の時期の風車詩社のメンバーの台南新報へ寄せた記事にはこの詩社の様子をうかがい知ることができる記事も登場する。李張瑞は利野蒼の名で『風車』3号の先述の「感想として…」の中で人名に混同があったということについて「衝撃隊」（台南新報1934年5月24日）という記事で述べている。彼は林永修の慶應義塾大学への進学の影響か、李張瑞の名で台南新報、台南新報社、1934年11月12日に執筆した「秋窓」というエッセイでは『三田文學』の誌面にも言及をしている<sup>(26)</sup>。『三田文學』は風車同人の間で読まれていたことが解かる。



島元鐵平、「『風車』をみる」, 台南新報, 台南新報社, 1933年12月9日

この李の「秋信」が掲載された台南新報の同号に「風車同人集」という形で風車のメンバーたちの作品が登場する<sup>(27)</sup>。林永修の林修二の名による詩「哀愁」も登場する。同紙には詩風帯社やうぐいす吟社、あらたまの記事は定期的に掲

載されていた。解っているだけで2回と決して回数が多くないとはいえ文芸欄の編集を行っていたメンバーがいるこの詩社の記事掲載はスペースが多くその意味では破格であり彼らの意気込みを感じることができる。李らによってその動向が紙面から発信されていることを踏まえるとこの新聞との関係がいかに風車詩社にとって重要であったかも伺い知ることができる。

先述の『風車』3号にある利野蒼(李張瑞)「感想として…」では水蔭萍(楊熾昌)に対して李は新人たちが1つのサークルになって進んでいくことは大変だと思うが、自分たちの同人誌は読まれる範囲に限界があるとはいえ、比較的読まれる範囲の広い新聞紙に依るのも文芸欄の編集者がその気持ちになって指導の立場に立ってくれたらそれこそ力強きものだろう記している。3号まで刊行を続けながら新聞との関係から読者を広げ、その上で水蔭にさらにこのグループの指導的な存在を求めようとしている。風車詩社の同人にとって、同人誌と



「風車同人集」, 台南新報, 台南新報社, 1934年11月12日

ともにある新聞の存在は発表の場としても読者や関係者のコミュニケーションの場としても大きなものであった。

この1934年11月12日付の「風車同人集」では水蔭萍（楊熾昌）、林修二（林永修）、李張瑞（利野蒼）の3名が作品を発表している。『風車』3号の刊行は同年の前半であったことを考えるならば、この年も11月になったこの「風車同人集」は実質的に最終号になった4号からの抜粋、あるいは4号刊行後に冊子を刊行するための資金難あるいは何らかの事情を抱える中で台南新報の文芸欄を通じて活動を継続する風車詩社の姿を伝えるものである。3人の作品は『風車』3号の作風と大きくは変化していない。それまで個人がそれぞれの名義でこの新聞の文芸欄に作品を発表し、それと並行するように雑誌が存在した。この段階になるとグループ名義で集団として紙面に登場してくる。

同じ紙面の中では台湾人の3人が持つモダニズム的な作風が際立ち、また彼らの作品に定期的に接し関心を持つ読者が台南新報の読者層の中にいたことも推測することができる。

現地の新人たちが集い作品を発表していくことに対する期待はあったかもしれない。

この試みは継続され「風車同人集」、台南新報、台南新報社、1934年12月4日にも再び登場する<sup>(28)</sup>。今日残された台南新報の記録をみていくと欠号が多くこの試みがどこまで継続され、どんな反響を呼んだのかという事まではさだかではない。

この2回目の「風車同人集」では李張瑞（利野蒼）に加えて『風車』3号やこの新聞の文芸欄に寄稿をしていた柳原喬が詩を寄せている。その内容は2作品ともモダニズム詩である。風車詩社は台南新報の誌面と連動することで、現地の書き手たちのつながりに食い込み、その方向性を関係者に発信し、関心がある関係者をその活動に巻き込むことにも成功していた。今日、残された『風車』3号に寄稿している書き手たちはこの地域で台南新報を読み活動に参加したのもいるのではないか。

2回目の「風車同人集」になると、最後の『風車』4号が刊行した後の記事と考えると良いかもしれない。刊行しなかった5号へのエネルギーと活動を模索しながら、次の一手を模索し実現したのが台南新報に掲載されたこれらの記事と考えていても良いだろう。

やがて風車詩社の同人たちは集団としての活動を終える。台湾島内を中心に活動を継続するものもいた。



「風車同人集」，台南新報社，台南新報，1934年12月4日

この時期の林永修は大学へ入学した前後のものである。二十歳前後のものでまだ大きな様式はでてきたとはいえない状態にある。風車での活動が実質的に終了している1935年に発表した「瞳」になると作品中に日付が入ることになる。

これ以後の林の作品には日記詩ともいべき、日々の中で詩的イメージをまとめ、日付入りで公開される作品がみえるようになってくる。これ以後、二十代後半の紀行文や散文詩、写真日記にいたるまで日々の詩想とその記録という要素はこの作家の中に継続的に存在するようになる。

### 5-2 西脇順三郎記念室の資料から解かる西脇のブレイクへの関心

小千谷の小千谷市立図書館にある西脇順三郎記念室には西脇の蔵書がある。この資料は西脇が使っていた時代の配架のまま現代に伝えられている。その中にブレイクに関する資料がある。ここ残された資料は西脇が活動をした1920年代から1960年代に関する資料である。これらの資料が今日判別できる西脇が所蔵していた資料だ。

西脇の蔵書はこの小千谷と津田塾女子大学に分納された。津田塾大学への資料は研究用の書籍が多く、小千谷へは西脇本人の原点となった小千谷の英学の為の資料が寄贈された。小千谷の資料は教育目的の蔵書を中心としており林永修が学んだ環境につながる要素がある。

一方、小千谷の蔵書は西脇が使っていた時のままの配架を再現しており、どれが蔵書かということがはっきりしている。西脇は小千谷に所蔵された資料については、どのページにどんな書き込みがされているか完全に記憶しており、東京から電話で指示を出すことで資料の中をあらためることができたとされる。

これらの出来事の背景には小千谷という土地と西脇順三郎の関係がある。若

き日にこの地で西脇は英語学・英文学を学び、東京の慶應義塾大学を経て世にはばたく。後に戦災を避けるためにこの地に租界をすることで自分の生まれた地とその自然を再発見し、それ以後は定期的に帰郷し最晩年はこの地で過ごした。諸橋漱次とのギリシャ語と漢語の比較研究は最晩年においてもこの地で継続された。

津田塾大学の資料はコレクションとして保存されていない状態にあり、今日となっては西脇所蔵の本が解らなくなってしまっている。慶應義塾大学のメディアセンター（図書館）や文学部に残された資料は今日では西脇の資料であるか否かは断定できない状態にある。

小千谷に伝わるブレイクに関する西脇の蔵書を見ていくと、最初に気がつくのはニュークリティシズムやマーシャル・マクルーハンとの交流でも知られるブレイク研究者・批評家のノースロップ・フライのブレイクに関する著作がないという事である。フライのTSエリオットに関する研究は所蔵がある。つまり西脇はブレイクも含むフライに関する研究成果には接した可能性もまったくないわけではない。フライはウィリアム・ブレイクに関する研究でそれまで謎だとされてきたブレイクの詩や絵画の世界に構造的な意味を与え、これはフライの業績の中で大きなものである。何故、西脇の蔵書の中にその成果が含まれていないかという事は興味深い。

ブレイクに関する作品の中では「天国と地獄の結婚」に関して直接マークをしている。これは西脇の著作には直接的に登場しない横顔だ。ブレイクが影響を与えたとされるハクスレーの『知覚の扉』を西脇は所蔵している。

西脇の著作をみていくとウィリアム・ブレイクは西脇の中で大きなテーマではなく、あまり論文や作品に直接的に登場しない。だがブレイクに関する知識は文字化・文章化・作品化される前の段階では用いられたと考えることができ、講義ノートや西脇に関する関係者の記録（座談会や会話など）とのリンクは推測できる。資料にのこる書き込みなど西脇の作業の痕跡は西脇の著作と対応関係がとれるものが多い。

アジア圏のブレイクの受容をまとめた研究史の Steve Clark and Masashi Suzuki, 『The reception of Blake in the Orient』, London; New York: Continuum, 2006の台湾の項目には林永修の名前はなく、台湾におけるブレイク研究は戦後からとなっている。だが林によるブレイク研究は、台湾人によるきわめて初期の研究である可能性が高い<sup>(29)</sup>。原稿が今日残っていないが、林の卒論の意味を考察することは大きい。その様子を考える上で、西脇が何を意識しながらブレ

イクを読んでいたのかということは重要な資料になる。

小千谷に残された西脇の資料の中には西脇の著作とつながる痕跡も残されている。例えば Mona Wilson, 『The Life Of William Blake』, Hupert Hart-Davis, 1948には下の新聞の切り抜きがはさまれていた<sup>(30)</sup>。西脇の詩集『人類』に収録された作品「空き地」にこの切り抜きの彫像が登場する。



Mona Wilson, 『The Life Of William Blake』, Hupert Hart-Davis, 1948に挟まれていた新聞の切り抜き

西脇が所蔵していたブレイクに関する資料の中で、彼が林永修を指導した時代以前に刊行されていた資料は Charles Gardner 『VISION & VESTURE A STUDY OF WILLIAM BLAKE IN MODERN THOUGHT』 J.M. Dent, 1916のみである。この本は残されたブレイク資料の中で最も書き込みが残されているものである<sup>(31)</sup>。

Charles Gardner の著作は慶應義塾メディアセンターに小山内薫文庫の一環として 『William Blake The Man』 J.M. Dent, E.P. Dutton, 1919が収蔵されている<sup>(32)</sup>。これは小山内の時代からこの著者のブレイク研究が読まれていたことを示している。小山内が慶應義塾大学で行った講義には西脇は出席していることもあり興味深い。

この Charles Gardner による 『VISION & VESTURE A STUDY OF WILLIAM BLAKE IN MODERN THOUGHT』 のどのような箇所にも西脇は書き込みをしていたのであろうか。フライが登場する前の、ブレイクの詩や絵画の関係や構造



車詩社の同人たちは内地の文学の動向にアンテナを張っていた。

また台南新報の文芸欄には『風車』の同人たちによる作品や活動の記録が多く残され、「風車同人集」という記事まで掲載されていた。これは台南新報の文芸欄の編集者が同人の中にいたことが大きく、それによりこの詩社の活動は現地でも影響力を持つものであった。

林永修の作品や文学には台湾文学で今日論じられる自然文学に通じるような森羅万象、自然への礼賛はある。林は富裕層出身であるため日本への抵抗意識はそれほど強くはないが出自への目覚めは年を重ねるにつれてであった。林の作品は日本人が台湾で記した作品のように、異郷や土俗なもの、日本の新たな植民地の文化として台湾をとらえていない。むしろ生まれの地である台湾を自然なものとしてとらえていた。

林は西脇順三郎の下で学び、西脇に学ぶ前から西脇的な詩を記していた。西脇の下でブレイクを学ぶことにより歴史や文化に対して「槐樹の憶ひ出」や「螢」にみとれるような洞察するような視線を身につけた可能性がある。

林の作品とブレイクに通じるのは詩の中に登場する象徴的なキャラクターたちである。しかし西欧も東洋の仏教の神話や宗教は林の作品にはでてこない。自然の美しさも良く登場する。やがて林は中国大陸を旅行することで、「槐樹の憶ひ出」や「螢」に登場するような自らが台湾人であるというアイデンティティも強く意識するようになる。

林永修の作風の影響を受けたのが妻の林妙子だ。戦後の台湾における短歌・俳句の位置と林妙子の作品について考察することはこれからの課題だ。

## 注

- (1) 工藤貴正, 『中国語圏における厨川白村現象』, 思文閣出版, 2010.
- (2) 大東和重, 『台南文学の地層を掘る』, 関西学院大学出版会, 2019, pp.101-102. 大東はこの1930年という年については検証されるべきであるという説を述べている。
- (3) 矢野禾積, 『アイルランド文藝復興』, 弘文堂書房, 1940年.
- (4) 「編集後記」, 『台湾文藝』, 台湾文芸連盟, 1936年3月号.  
「文聯主催 総合藝術を語るの會」, 『台湾文藝』, 台湾文芸連盟, 1936年3月号, pp.45-53.  
『来る七月來台する舞姫崔承喜嬢を囲み東京支部で歓迎会』, 『台湾文藝』, 台湾文芸連盟, 1936年5月号, p.39.  
崔承喜, 「私の言葉」, 『台湾文藝』, 台湾文芸連盟, 1936年5月号, pp.40-41.



- 「崔承喜特集号を東京にて編集」、『台湾文藝』，台湾文芸連盟，1936年5月号，p.46.
- 崔承喜，「尊し母の涙」、『台湾文藝』，台湾文芸連盟，1936年6月号，pp.40-43.
- 「台湾文学当面の諸問題 文連東京支部座談会」、『台湾文藝』，台湾文芸連盟，1936年7月・8月合併号，pp.2-19.
- 崔承喜，「私の舞踊について——ラヂオ放送の原稿」、『台湾文藝』，台湾文芸連盟，1936年7月・8月合併号，pp.74-75.
- 曾石火，「舞踊と文学——崔承喜を迎えて——」，台湾文芸連盟，『台湾文藝』，1936年7月・8月合併号，pp.76-81.
- (5) 「半島の舞姫 崔承喜嬢」，台湾日日新報，台湾日日新報社，1936年6月16日。  
 「半島の舞姫 崔承喜来る」，台湾日日新報，台湾日日新報社，1936年6月27日。  
 「楽燕と崔承喜」，台湾日日新報，台湾日日新報社，1936年7月3日。  
 「崔承喜来る」，新高新報，新高新報社，1934年6月7日。  
 「崔承喜遂に来る」，臺灣時事新報，臺灣時事新報社，1934年6月6日。  
 一記者，「崔承喜印象録」，臺灣時事新報，臺灣時事新報社，1934年7月10日。  
 「南島に踊りぬく」，大阪朝日新聞，朝日新聞社，1934年7月1日。
- (6) 台湾日日新報，台湾日日新報社，1936年7月3日。
- (7) Anon., 「芸能界彙報」，『藝能』，舞踊芸術社，1943年9月，p.36.  
 林明德は淡水出身。日本大学芸術学部に進学。そして男性舞踊家として崔承喜に師事し、後に石井漢に学ぶ。1943年9月25日に林明德第一回舞踊発表会（日比谷公会堂）を行っている。  
 作家で同郷の王昶雄が河原功編，『王昶雄作品集』，緑蔭書房，2007年に収録されている  
 「舞踊家の友に——私の書翰集より（四）」（pp.289-292）  
 「東洋的幻想の追及：林明德氏の新作舞踏を中心に」（pp.301-306）  
 「舞踊界の鳳雛——淡水の生んだ林明德君」（pp.351-353）という文を残している。  
 王と林の関係については台湾でも研究が始まっており、李敏忠——「皇民の反抗：臺灣人的新生苦旅——以王昶雄《淡水河の漣漪》、《奔流》以及《鏡》小説的考察為例」，〈<http://ip194097.ntcu.edu.tw/giankiu/GTH/2006/TSIT/lunbun/1-9%E6%9D%8E%E6%95%8F%E5%BF%A0.pdf>〉，（accessed 2016-10-26）などに見ることができる。
- (8) 下村作次郎，「台湾人詩人吳坤煌の東京時代（1929年-1938年）——朝鮮人演劇活動家金斗錫や日本人劇作家秋田雨雀との交流をめぐって」，『関西大学中国文学会紀要』，關西大學中國文學會（27），pp.31-49，2006-03.
- (9) 西脇順三郎，「媽祖祭を手にして」，『媽祖』，第6冊，媽祖書房，1935年9月，p.30.
- (10) 中島利郎，「日本統治期台湾文学研究——西川満論」，『岐阜聖徳学園大学紀要外国語学部編46』，岐阜聖徳学園大学，pp.59-64，2007.

- (11) 台湾日日新報, 台湾日日新報社, 1940年1月20日.
- (12) 台湾日日新報, 台湾日日新報社, 1940年1月10日.
- (13) 台湾書籍雜誌商組合台南支部編, 『詩書と美装本の展覧会』, 台湾書籍雜誌商組合台南支部, 1940.1. この組合で組合長をしていたのが、村崎長昶だ。村崎長昶, 『記憶をたどって八十年の回顧録』, 西田書店, 1983. は外地の出版文化の重要な資料だ。彼は琉球の芸能についても本を出している。台湾書籍雜誌商組合については日比嘉高「外地書店を追いかける」, 『台湾・新高堂書店村崎長昶——事跡と回想録』, 金沢文圃閣, 2020, pp.182-234で分析されている。
- (14) 田中初夫, 「圖書館週間の反省」, 『文献報国』, 朝鮮総督府図書館, 1940.1, p1.
- (15) 庄司野々実, 『鳳凰木: 作家庄司総一の生涯』, 東京: 中央書院, 1976.  
庄司総一, 『ノノミ抄: 自伝的悲歌』, 東京: 思潮社, 1962.
- (16) 吉田悠樹彦, 『林永修と林妙子 台湾と西脇順三郎』, 「三田文學」春号, 2020年. 生前、本人は LIN Eng Siu と署名していた。
- (17) 戸田房子 (1914年-2011年) は1914年に東京市赤坂区青山南町に生まれまもなく渡台し台南市に居住した。養父は台南で度両衡商で客齋だった。彼女は1930年に台南州立第一高等女学校卒業する。
- (18) 吉田悠樹彦, 詹慕如 訳, 「『日曜日式散步者』與戲劇、舞蹈、表演, 以及西脇順三郎」, 黃亞歷, 陳允元編, 『共時的星叢: 風車詩社與新精神的跨界域流動』, 原點出版, 2020, pp.54-65.
- (19) 台南新報, 台南新報社, 1926年10月4日.
- (20) 台南新報, 台南新報社, 1933年3月2日.
- (21) 島元鐵平, 「『風車』をみる」, 台南新報, 台南新報社, 1933年12月9日.
- (22) 台南新報, 台南新報社, 1934年7月11日.
- (23) 水蔭萍, 「炎える頭髮 詩の祭禮のために」(上), 台南新報, 台南新報社, 1934年4月8日.  
水蔭萍, 「炎える頭髮 詩の祭禮のために」(下), 台南新報, 台南新報社, 1934年4月19日.
- (24) 利野蒼, 「感想として…」, 『風車』3号, 1934.3.
- (25) 利野蒼, 「感想として…」, 『風車』, 風車詩社, 3号, 1934年, pp.21-26.
- (26) 李張瑞, 『秋窓』, 台南新報, 台南新報社, 1934年11月12日.
- (27) 「風車同人集」, 台南新報, 台南新報社, 1934年11月12日.
- (28) 「風車同人集」, 台南新報, 台南新報社, 1934年12月4日.
- (29) Steve Clark and Masashi Suzuki, 『The reception of Blake in the Orient』, London; New York: Continuum, 2006
- (30) Mona Wilson, 『The Life Of William Blake』, Hupert Hart-Davis, 1948.
- (31) Charles Gardner 『VISION&VESTURE A STUDY OF WILLIAM BLAKE IN MODERN THOUGHT』 J.M. Dent, 1916.
- (32) Charles Gardner, 『William Blake The Man』 J.M. Dent, E.P. Dutton, 1919.